

小林 亨 先生のご退職に想う

竹 田 正 純
(フランス語)

小林 亨 先生は、去る 3 月 31 日をもって、定年までの 3 年を余し退職された。私たち、あとに残るものとしては、これは残念でならない。しかしこの度のご決意が、先生の熟慮の末の結論であるなら、私たちはこれを受け入れる以外の方法をもたない。それにしても、ほぼ同じ年月を働き、数々の思い出を共有するものにとっては、返す返すも残念でならないと言うほかはない。

先生が駒沢大学にお勤めになったのは、はるかな先輩であったが、私より 1 年だけ早く、大学紛争の起きること 1 年前である。先生は病で何度か学業を中断されたから年の開きはあるものの、私たちに共通の思い出は、大学紛争下のあの数々の会議であり、会議のあとの酒席であり、文学部から独立後の外国語部の日々である。私たちは、ほぼ同じ年月を働き、ほぼ同じ思い出を身にまとっているのだ、と言わせていただきたく思う。はるかなる先輩を同輩扱いするのは非礼をなすが、やはり、私はこう言わせていただきたいのである。

私はいつも、先生を「小林さん」と呼ばせていただいていた。これは私が生意気であることの証拠ではなく、「同志」としての思いが強いからである。先生は、私には、私たちが就職したころのあの激動の時代を、共に生きた同志であるからである。

大学全体が何が何だかわからぬまま右往左往していた当時、駒沢大学に籍を置くすべてのものが、あの時代の犠牲者であった。今にして思えば、学生や教職員、また当時、私たちが仇敵と見做した人たちでさえ、時代の被害者

であった。しかし時代というものが、ありていに言えば、私たちの生きる条件であるなら、私たちは、その条件の中で懸命に生きた、という記憶がある。

小林先生が去られ、往時を語りあうことのできる人を、また一人、周囲から失うことになる。淋しいかぎりである。

先生には、永い間お勤めいただき、さぞお疲れのことと拝察するが、いつまでもお健やかに過ごしていただきたく思う。いつも先生のおそばに置いていただいたことを、有り難く深く感謝申し上げたい。

“いつもつれづれ”

山 縣 敏 夫
(英 語)

小林 亨 先生が退職されるという話を聞いて一番ショックを受けたのは私だったのかも知れません。20数年間いつも隣の研究室で公私にわたって色々ご指導をいただいていたきました。

ここ数年は不眠が続いておられたようで心配はしていたのですが、まさか現実におやめになるとは考えられませんでした。先生は大宮に土地をお持ちで新たに家を建てられ奥様と二人で悠々晩年を過ごされるのですから大変うらやましい境遇だとは思いますが、これまでの大学での生活に神経が堪えられなかったのではと考えると、我々にも大きな責任の一端を感じずにはいられません。小生と同年輩で定年までまだ3年を残して大学を去られてしまうと、英語科の専任としては小生只一人大正生まれが残されたわけです。性格も生活環境も健康もすべてが大変かけ離れたものでしたが、私の人生では教

えられる事の非常に多かった人物と言わざるを得ない先生です。長いお付き合いの中で記憶に残っているのは、やはり、酒と旅行のことが最も多いように思います。40歳代には良くお伴してあちこちと飲み歩いたものです。今ふり返って見ると、若い頃から文学などという美名にかくれて無頼の生活にあこがれて来た小生に、本当の人生の淋しさや苦しみの何たるかを教えてもらったような気がします。先生の青春が闘病の日々であった事を仄聞し、療養生活の頃の写真など拝見していると、何か心に沁みる感銘を覚えたものです。比較的大柄な先生の若い頃の姿は、水上勉か吉行淳之介のように髪を前に垂らした痩せ細った38キロの和服の青年でした。8年間も療養生活をおくられたことが人生を見る目の卓越さにつながってきたのかも知れません。或る時先生は「療養所のベッドの下に蛇がとぐろを巻いていたこともあり、又庭を散歩すると蟬が肩にとまりました。あの頃の私は死んでいたのです」と語られたことがありました。又浅草をこよなく愛し、興いたれば浅草のうたをうたい、新相馬をうたわれたあの美声を、大学を離れたあとも折にふれ聞かしてもらいたいものです。旅行も先生の印象を脳裏に残してくれました。

どういうわけか法学部の雨宮先生、国文科の亡き鈴木先生と私との四人旅がほとんどでした。日本中あちこちと、それぞれの造詣と蘊蓄の深さに感心しながら案内してもらったものです。中でも東北の旅は今でもはっきりと思い出されます。

5月1日、八甲田山を車で登り、両側2メートルもの積雪の中を車で走って行くと、まるでリュージュで滑降しているような雰囲気でした。途中で誰言うことなく「そろそろ雪割りウィスキーにしましょうか」と、雪をけずってサントリーを口にしたのも、飲兵衛四人が同行の仲間であったからでしょうか。明治時代に日本陸軍の兵士が、雪中行軍で多くの凍死者を出した大惨事のことなどけろりと忘れて、楽しい思い出となりました。翌2日は二代目若の花のふるさと大鱈温泉で美人おかみの歓待をうけ、旅の疲れをすっかり洗い流すことが出来ました。5月3日は朝から晴天にめぐまれ、弘前城公園のお堀端で又一杯やりながら、桜の美しさを味ったものでした。ゴールデンウ

イクを雪と桜で飾りつけるなどは、それまで考えたこともありませんでした。

青森から青函連絡船の発着所を眺め、リンゴ市をひやかし、朝の魚市では目を見はるような豊富な海産物、さらにしゃこや帆立ての串焼きの立ち食いなど、それぞれなつかしい思い出です。

又、今は有名になった林家正雀が駒沢周辺に住んでいた若い頃、小林先生と一緒に焼鳥屋で同席し、その後も時々先生のお伴をして高座や発表会などへ応援に出掛けました。彼が真打ち昇進の折、帝国ホテルで披露宴があって私もウン万円をお祝儀として張り込んだつもりでした。ところが小林先生がすばらしい和服の生地を祝いに贈ったことをあとで知って、道楽でもとても歯が立たないと感じたものです。

又、学内における先生の存在も大変大きく、今となってはぼっかりあいた穴の大きさがびっくりしています。私が主任をしていてどうしても会議がまとめられず「先生も意見を言って下さらないと困ります」と申した時に無口な先生が「反対の時は“NO”とはっきり言いますから黙っていれば賛成と思って下さい」と言われた事で大いに元気づけられたことがありました。又、若い人の間で「ゴマをする」とか「足を引っぱる」などの言葉が聞かれた時、先生は私に「すりたい者にはすらせればいいし、引っぱりたい者には引っぱらせればいいじゃないですか」と言われた言葉が、その後の私の人生に大きく影響してきたように思います。

私どもの年代は戦争中の教育で英語など軽んじられた時代で、今でも語学力への劣等感に悩まされていますが、英作文の得意な小林先生に、いつ語学力をつけられたかとお聞きしたら「やはり療養時代に通信教育をやったおかげでしょう」と答えられました。私が健康であったことが諸悪の根元と思っています。これはジョークです。どうぞ呉々も健康にご留意下さい。

年寄りの駄文です。私の記憶違いや暴言には寛大なご処置をお願いします。(93年秋)

我感ず、ゆえに我あり

前 田 祝 一
(フランス語)

この言葉を本当にコンディヤックが使ったかどうかは知りませんが、『感覚論』(創元社、昭和23年)の訳者の三宅徳嘉先生が、巻末に付された語彙集の〈感覚〉の項の中で、「そして Descartes の Cogito に代えるに sentir をもってし、《Je sens, donc je suis》と言う」と解説しておられるのを借用したものです。かつて、「あなたは情緒的だから」と批判されて、「情緒的なのがなぜ悪い」と反発を覚えた学生時代を思い出しますが、今でもこの点は良いのか悪いのか自問自答を繰り返しています。人の心に生起するエモーショナルな部分などうんざりだ、とする立場は私も共感しているのです。

小林 亨 先生はローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニィ』を翻訳されましたが、その冒頭の場面、すなわちカレーの町に着いたばかりのヨーリックが聖フランシス派の貧しい修導僧の喜捨の求めを厳しく拒絶したのちに、彼の心の中で起きる葛藤はエモーショナルなものではないでしょうか。ともあれ、小林先生とお会いしてすぐの頃だったか、居酒屋でこの『センチメンタル・ジャーニィ』の話をしながら杯を重ねたことを記憶しています。

お前は歌うな

お前は赤ままの花やとんぼの羽根を歌うな

風のささやきや女の髪の毛の匂いを歌うな

すべてのひよわなもの

すべてのうそうそとしたもの

すべてのもの憂げなものを撥き去れ
すべての風情を擯斥^{ひんせき}せよ
(……)

と中野重治の詩を引用してみても、一つの抒情を排するのに、別の抒情でもってしなければならないことを、この詩は教えているように思えるのです。つまり感覚は感覚の水脈で通底しているというように。

ヴァン・ティーゲムはその著書『フランス文学に対する外国の影響』(P・U・F、1961)の中で1769年にフルネによって仏訳された《Voyage sentimental》の大成功について述べ、「哲学の時代に代わってセンチメンタルな時代が来ていたのだ」としています。そして「リチャードソンの愛好者としての大衆の一部は、ブルジョワ風の、お涙頂戴のレアリスムに楽しみを見出していたが、他の部分はスターンの中に、その表現においてナイーブな、取るに足りないような具体的な細部にも注意を払う、彼のほほえましくもユーモラスな感性を味わったのだった」と説明しています。この後半の部分、つまり具体的な細部に注意深い感情こそ、わが愛するジェラルド・ド・ネルヴァルにも受け継がれたものでした。『東方紀行』序章の〈ウィーンの恋〉は、「きみはぼくに時折旅の感傷的印象を書き送ることを約束させた。きみのいったことだが、どんな風景描写にもましてそれに興味をそそられるからだ。さてそれでははじめることにしよう。ところでスターンとカザノヴァの両人がぼくをたすけて、きみを楽しませてくれるといいのだが。(……)」という風な導入部です。

自分を紹介することを厭うて、デンマーク王の道化師ヨーリックと同じ名前の者だと名乗るヨーリックの『旅行記』を愛された小林先生、20年以上も同じ職場でご一緒させていただいたことを幸いに存じます。このとりとめのない一文でもってご退職への挨拶とさせていただきますこと、どうかお許し下さい。(平成5年9月30日)

まとまりの無い思い出

吾 妻 雄次郎

(ドイツ語)

かねがね耳にしていたことであつたが、小林 亨 先生が、この3月末をもって、定年を待たずに退職なされた。お引き留めすることはできなかったのか、心残りとして、何かしらのつぴきならない気持ちに駆られる半面、どこか羨望の気持ちの入り交じった複雑な心境、矛盾した気持ちもまた否めないものである。どなたかがお辞めになったり、逝かれたりすると、それぞれの科の誰かが、何か思い出のようなものを書くことになる。そのような時、とくに他科の場合は、外国語部と比較的、いや、かなり古くから係わりをもっているという理由で、その任を負うことになるのが、歳嵩な者の宿命である。そんな訳で、亨さんの思い出を書くことになってしまったが、私は自分が必ずしも適任者では無いような気がするのである。たしかに決して強烈な思い出などではなく、むしろ淡い、と言った方がぴったりするような、それでいていつまでも、かすかに余韻の残る山間の炭焼きの煙にも似た思い出なのである。しかし人間というのは、対する相手を、リトマス試験紙に仕立ててさまざまに色を変える一面をも持っているもので、袖振り合うた者が、その時々思い出を綴れば、何かそこに小林 亨 像のデッサンが出来るような気がするのである。

8月に入って間もない頃、今年の夏はあまり暑い日がなく、冷夏につきものの農作物への悪影響が囁かれている頃だったか、転居のお知らせを頂戴した。5月26日(水)、亨さんを囲んでの送別会のおり、大宮に家を新築しておられるということを聞いてはいたが、転居先の住所が大宮市高鼻町となっ

ているのには、縁というほど大袈裟なものではないが、ささやかながら係わりのようなものを感じたのである。私が駒沢に勤め始めるまえ、したがって今から30数年前のことになるが、浜中英田というドイツ語・ドイツ文学の先生が、大宮市の高鼻町から来ておられた。私を駒沢に世話してくれた恩師Y先生から、一度挨拶をしておくようにと言われて、この先生を高鼻町のご自宅にお訪ねしたことがあった。亨さんの『転居のお知らせ』に述べられているような、「近くに氷川神社や大宮公園があり緑ゆたかで静かなところ」を、私は30数年前の記憶を辿りながら、恐らくは驚くほど様変わりしたに違いない四半世紀以上もの歳月を計算に入れて、あの界隈を思い浮かべるのである。それとも日本国中至るところに荒れ狂い、今なおその名残を止めている経済開発の濁流から、神社と公園は、その存在の尊厳なるが故に免れたのであろうか。事実そうなのかもしれない。いやそれほどではないにしても、とくに国道246沿いの荏田から越された亨さんにとっては、神社と公園の存在は、静けさと緑の豊かさを昔ながらに保ち続けていて、土地を手に入れるのに幾度か足を運ぶうちに、そのまま永住するにふさわしい処として印象に残ったのかもしれない。

荏田は、この地名に囲まれた田園都市線の駅名を江田で表示している。もちろん、東西南北を語尾につけて町名を表示している荏田が本来の呼び名であり、江田は東急が溝の口からさらに長津田へと路線を延長開業するに際して付けた、新しい乗客向けの呼び名であることが容易に想像がつく。亨さんのところは語尾に町のみがついている町区で、その一角に立つ高層マンションの、かなり高い階に住んでおられたように思う。ここにいつ頃から住まわれたのか、僕が駅にして3つほど先の、青葉台というところに住むよりも先だったか、後だったか定かではない。そんなことはどうでもよいことであるが、たしか僕より少し早かったのではないかと思う。と言うのは、当時亨さんが住んでおられたマンションには、住居者専用の屋外プールがあって、夏場は開業するといっているので、越して間もない、この地に不案内な僕は、当時高校生と中学生だった二人の息子を連れて、泳がせてもらった記憶が、ついこ

の間のように残っているからである。プールは、たぶんそのとき限りであったと思うが、その後一、二度お宅に伺う機会があって、写真のお話しをいろいろお聞きした記憶がある。シャッターを押せば何とかよく写る簡易なカメラしか持っていなかった僕は、専用のガラス戸棚に取まったドイツ製や日本の高級カメラに驚きと羨望の眼で見入ったものである。たしかこの時の刺激と、訥々と話してくださる亨さんの、光と陰とシャッターチャンスのお話しがきっかけとなって、多少一眼レフの味わいに魅力を感じ、どこのレンズも今はそんなに変わりが無いからなどと慰められて、分相応の、手の届く範囲の日本製を手に入れたのだったと思う。そのお陰で、今になっても、道を隔てた斜向いの玄関先に、背丈以上に幾重にも伸びた葉先から、まるでフラミンゴの頸のようなピンクの蕾を垂れて、夜中のほんの幾時間かのあいだ、絢爛たる純白の花を見せてくれる月下美人を、道路側からこっそり210ミリのズームで狙ったりすることも忘れずにいるのである。

お辞めになる数年前から、熟睡があまりできないでいることをお聞きしたことがあった。眠るために薬を飲む。それが悪循環になって、昼夜逆転しがちな生活であることを、とくに嘆く様子でもなく、不眠とも結構うまく付き合っているような、淡々とした調子でお話しされたことがあった。しかし近年、昼の出講を避け、主として好んで二部の授業を持たれていたのは、不眠のために、翌朝の起床に何か不安を持たれ、周囲に迷惑が及んではという人一倍強い配慮からではなかったかと思う。そしてこの控えめな配慮と頑ななまでの自由な自己保全が、早めの退職を選ぶ事によって、俗世間との摩擦の回避を選ばれたのではないかと、ふと考えさせられるのである。いずれにせよ、今となっては、よほど巧みに誘い出さなければ、亨さんの甲高い美声に綴られる『南部牛追い唄』は聴けなくなってしまった。しかし諦めてしまうのは未だ早いと思っている。いつの日かに希望を繋ぎ、大宮高鼻町の生活が、妙子夫人ともども、亨さん固有のものとして、悠ったりと充実した日々であることを切に願うばかりである。(1993年9月末日)

小林 亨 先生のご退職を惜しむ

中 村 璋 八
(中 国 語)

小林 亨 先生は、私と同年の大正15年の早生まれで一緒に古稀を迎え退職するはずであった。それが突然ご病気を理由に3年の任期を残して潔ぎよくご退職を決意されたのは誠に惜しくもあり、また、一方、この年齢になると体力も衰え、何事にも意欲を失って来ることを思うと羨ましくもある。夏休み中に縁ゆたかな埼玉県大宮市に転居され、悠々自適の生活を送っておられ、身体も、そして精神も落ち着いたとのお言葉を頂き、今ではこれが先生にとって最良の選択であったのだと思うようになった。

小林先生とは、まだ外国語部が創設されず文学部に属していた時からご一緒に、その交際は実に25年にも及んでいる。しかし、先生は英語、私は中国語に属していたことと、先生はお酒を嗜まれ、先生方と共に酒宴で歓談されることを好まれたのに対し、私は全くお酒は飲まず、そのような席に出ることは苦痛であったので、そのような場での先生のご様子は知ることができなかった。その上、先生は消極的で無口であったので余り親密なお話しをする機会もなく、エレベータの中や教場に行く途中でお会いした折に時々言葉を交わす程度であまり深いお付き合いをしないまま25年の歳月を過ぎてしまったことは残念であった。

先生は数年前から不眠症に悩まされていたとのこと、私も同様の病気であったので、この病気のことについては時々その病気の苦しみについては語り合った。私は何んとか勤めてはいるが、先生は遂に休職を余儀なくされる程にご病気も重くなって行った。だが、私は遂に一度もお見舞いにも行かなかったことは私の怠慢であって今でも申し訳なく思っている。先生のご休職中

に短期大学国文科の故鈴木儀一先生を偲ぶ会を4、5人の飲み仲間で開催、その席に私が学生時代にアルバイト教師をしていた時の教え子、加代子夫人も招かれた。その折に小林先生も参加されたことを夫人からお聞きし、ご病気も順調に快方に向かわれていると喜んでいました。それも今から思えば無理をして出席されたのであろう。先生はそのように思いやりのある温かい人柄であった。今は世俗から離れて自由な生活をしておられるので、ご病気も良い方に向われ、今後の人生を有意義に送って頂くことを願っている。なお、小林先生の外国語部の送別会が5月の下旬に行われた。丁度、その折は私は「中国域外漢籍国際学術会議」から招待を受け、台湾の国立中央研究院で研究発表や司会をしており心ならずも出席することが出来なかった。そこでその罪滅ぼしにその会議の報告を「退任記念号」の巻末に記した。お許しを乞う次第である。

小林先生との歲月

清 水 祐 次
(英 語)

大変おこがましいことではあるが、私にも少しは小林先生に似ているところがないかしらと考えてみた。三つくらいはありそうである。

まず思いつくのは、カメラが好きなこと。

しかし、そうは言っても、年期、腕、センス、その他どの点からみても、先生は私などとは所詮レベルそのものが違う。それでも先生からは、クラシックカメラの魅力や広角レンズの新鮮さなど、いろいろ教えていただいた。写真を撮ることより、カメラそのものへの愛着の方が優先する好みの偏りに

おいても、私は先生にひそかな共感をいただいている。たかがカメラとはいえ、わが「悲しき玩具」として、長い年月にわたっていかに心暗き日々のなぐさめとなってくれたことか。これもひとえに先生からの感化に負うものである。

次に、寡黙なこと。

この点では、ひょっとすると私の方に勝ち目があるかも知れない。でも喜ぶのは早い。同じ silence でも先生の沈黙は、私ごとき小心者の無口とは本質的に無縁で、深い奥行きと重みを感じさせる、いわば豊饒な静寂ともいうべきものである。落語の名人などがみせる絶妙な「間」の存在感にも通じるかも知れない。

そういえば、うちとけた折りなどに時たま先生がして下さる軽いお話の一つ一つは、飄々としたなかに気品のある、何ともいえないおかしみが醸し出されて、さながら井伏鱒二や小沼丹などの短編にも似た味わいがある。

さらにもう一つ、いわゆる「まわり道」を経てきたこと。

先生は十代の終わり頃から十年余りの療養生活を過ごされた後、某大学院に進学された。一方私も高卒後、当時の家庭の事情から、静岡の田舎で小学校の代用教員を十年余り勤めたのちに遅まきの進学をし、千載一遇ともいえる偶然から、同じ大学院に迷いこんで、先生にお会いする光栄を得た。因みに、当時の同大学院はそれぞれの過去をもつ年配者の集まりで、周囲が三十代・四十代の人達ばかりだったから、気おくれがちな私にとっても、どこことなく気楽な雰囲気があった。

先生は十八世紀の小説がご専門であり、私も古い小説が（ただ単に）好きだったので、O先生のリチャードソン、デフォー、ナッシュ、ラングランドなどの演習にご一緒に出席させていただいた。豊かな学識はもとより、超俗・孤高のすがすがしいお人柄の小林先生に、尊敬と憧れの念をいだきつつ、身近に学ぶことのできたあの頃の日々が懐かしい。

その頃の或る日、何かの会の帰りに先生と二人だけになったことがある。日頃先生を深く敬愛していた私は、思わず緊張していた。無口なくせに私

は、固くなると往々にして、言わずもがなの愚言を発しては後悔にさいなまれる悪癖がある。その時も私は、夕暮れの道を先生と並んで歩きながら、適切な話題がみつからないまま、「会誌に何か書いてくれませんか」などと、全く場違いなことを小賢しく口走ってしまった。(当時私は助手を兼ねていたので、OB会誌の原稿集めをする必要もあった) 言ったあと、例によって一瞬はっとした。

「そういう有害無益なことはしたくないね」

先生は気乗りのしない面持ちで、しかしあっさりと言われた。それから少し間をおいて、

「別に有害でもないか。まあ、無害無益ですよ」

と私を気遣うように言い直された。折角の先生とご一緒の貴重なひとときを無にして、先生に不快な思いをさせてしまった自らの愚かさを悔いながら、その時にしみじみと味わった痛切な自己嫌悪は、いまだに忘れ難いものがある。

それから数年後、私は本学に職を得て、またしても先生に再会するという僥倖に恵まれた。先生からすれば、不肖の後輩にしつこく付きまとわれて、いささかうっとうしく思われたかも知れない。

以後いつしか四半世紀の歳月が流れた。目と鼻の先の研究室に伺う機会はいくらもあったのに、何分にも私の内気な性格が災いして、先生と親しく語り合った言葉は、全部併せてもこの小文の量にも及びそうにない。

しかしその間に、ほんの数回ではあるが、僅かに交わした数少ない言葉を通じて、いやむしろ言葉によらずして、日常内面深く秘められている先生のお心に、親しく触れ合うことができたと思える貴重な体験がある。思わせぶりのようだが、それがどんなことであったかは、人には話したくないし、また話そうにも言葉では表現できないような気がする。

思い出すままに

田 中 保
(英 語)

駒沢大学外国語部教授、小林 亨 先生が26年間という永きにわたって教鞭をとられてきました駒沢大学を、体調思わしくなく今年（1993年）3月末をもって依願退職されることになりました。思い起こしてみますと、先生にはじめてお目にかかったのは、昭和46年（1971）4月から私が非常勤講師として駒沢大学の教壇に立つようになってからのことです。それから2年後の48年に専任講師にさせていただいてからのお近づきですから、20年以上のお付き合いをさせていただいていることになります。いまもなお、私の脳裏に鮮明に残っていますのは、停年退職の吉田先生と新任の佐藤千春先生（現在文学部所属）と私のための外国語部歓送迎会を催して下さいましたときの宴席で、私たちのために民謡「新相馬節」を透き通った声で朗々と心をこめて歌っていただきましたときのさっそうとした潑刺な先生のお姿です。背広をきちんと着こなされた立派な風采と柔和な中にも気骨のある容貌から受けました印象は大学教授そのものといった観がございました。その後、先生はお歳を召されるにつれまして教育者として、研究者としての風格に重厚さを増してまいり私などは近寄り難いものを感じいました。

先生は（旧）早稲田から法政大学の大学院に進まれ、イギリス文学、主に18世紀あたりをのちの「意識の流れ」の作家ジェイムズ・ジョイスに影響を与えたローレンス・スターンに深い関心をおもちで研究されていたようでしたが、物静かで言葉少ない先生ですので、ご自分のことをあまり語られませんでした。私は先生が法政での私の先輩であることは非常勤講師のころから存じ上げていたのですが、いまは亡き本多顕彰先生が大学院での演習ゼミの

折りに、「あなた方の先輩に小林というのが3人いましてね。3人ともよくできましてね。……ただ、小林間違いをときどきいたしました」とお話しして下さいましたことがありましたが、それらの方々が現在芝浦工業大学教授のT・小林先生であり、武蔵野音楽大学教授のK・小林先生であり、そして小林亨先生であったことを知ったのは、駒沢に勤めて数年経ってからのことだったと思います。いまにして思えば、本多先生は3人の小林間違いについてお話をしたかったのではなくて、不勉強であった私たち後輩に優秀な先輩の方々を見習ってしっかり研究に励みなさいという真意があったように思われてなりません。3人の小林先輩のおひとりが先生であることを知ってから、私は先生にかなり親近感を抱くようになりまして、公私にわたっていろいろとお話させていただくようになりました。

先生はいつも背筋をしっかりと伸ばされ、毅然とした態度でしたが、その態度は駒沢界隈の酒亭においても同じで、少し盃を重ねましてもことばがやわらぐくらいで身を崩すようなことはなく、先生のような酒の飲み方こそまさに「酒をたしなむ」と申してもよいのではないのでしょうか。先生から学問上のことばかりではなく、人生上のことも多く学ばせていただきました。お話を交わすうちに、先生は誠実で、実直で、シャイなお方であると痛感いたしました。先生が英語主任をなさっていた時のことですが、文学部英米文学科から非公式に移籍の誘いが先生にごさいましたが、上から順に行くようになると上下関係的になってよくない慣例になると困るから、順序を変えた方がよいのではないかとおっしゃられて、先生は辞退されて他の先生を推挙されましたが、英語全体のことをお考え下さってご自分は英語の方に留まって下さったときは、ただ、頭が下がる思いでした。その結果、先生はもう1期主任をやる羽目になってしまい、たしか3期6年やられたと思います。日ごろ口数の少ない温厚な先生ですが、いつも英語や外国語部に人知れず心をくだいて下さっていたのではないのでしょうか。先生、長い間ほんとうにご苦労さまでした。感謝いたします。先生と奥様のご健康をお祈りし、今後ともご指導のほどお願い申し上げます。

思い出すことども

岸 本 茂 和
(英 語)

小林 亨 先生と親しく接するようになったのは、私が専任講師として駒澤大学に研究室をあたえられた1976年いらいのことだから……、数えてほうほう18年になる。研究室といってもそれは旧1号館のころのことで、ひと部屋に4人が雑居するというありさまだったから、いまからすれば、それだけでも隔世の感がある。当時先生は二期目か三期目の英語主任をつとめておられたのではないかと思う。まだたしか50まえで、それがいつのまにか華甲をすぎて昔ふうにならば古稀にちかづき、定年をあと数年をあましながら早期退職されるとは、うらめしいかぎりだ。あまり健康がすぐれないとはいえず、せめてあと3年がんばってくれたら……と思うのは私だけだろうか。

ところで18年のうち最後の10年間は、住まいがおなじ鉄道沿線の、それも互いに隣の駅どうしで、ときおり最寄りの駅の構内や駅前でお会いすることもあるという地理的關係に私たちはあった。家妻をつれてお宅にお邪魔したこともあったし、先生がボージョレイ・ヌーボウに凝っていたときには、毎年その季節になると声がかかって、奥様お手づくりのご馳走にあずかったこともある。また学会へも一再ならず一緒したこともあれば、ある年の夏休みには常州の海岸町で数日をともに過ごしたこともあった。そんなおおくのちいさなことどもには、しかし、いつも酒杯が介在していたように思われる。

私にはこの酒杯のことをぬきに先生を語ることはできないような気がする。こんなことを聞いたことがある。あるとき組合の会議で珈琲とケーキがでると、大の男にこんなものを出すとはけしからんと抗議もせず、しかし

心中ひそかに思うところあって、断固口にしなかったというのである。この抗議もせずにしかし心中ひそかに……が、じつは先生の先生たるところであると同時に、早期退職をするに到った原因のひとつになっていたのではないかと私などは思っている。口ふくるるわざというように、文句はいわなければいけないのである。

先生はなかなかの好奇心のおひとである。長続きしないこともままあったようだが、なにかの稽古ごとにかよったり、水泳クラブに属したり、どこそこの講習会にはいったりというふうだった。しかし先生のたのしみの〈トリティック〉は、なんといっても酒と唄と写真である。唄はからきしだめ、写真はフル・プルフ写真機でもうまくとれないクチの私に語れるのは、だから、せいぜいお酒くらいしかないが、ただ写真のことについては、先生のそれがそのことばのほんとうの意味で、くろうとはだしの腕前であり、イギリス留学時代の風景写真などは、まことに見事なできばえだった。レンズを通したときの先生の眼は、まことに炯々爛々としているにちがいないと思わせるほどの被写体への接近のしようである。

さて、酒と、そして唄のはなしである。先生は茨城県の、それも野州にほどこかい土地の素封家の出で、家は代々酒造を業としてきたと聞いている。だからこの百葉の長は、先生にとっていわば「父母未生以前」の存在であり、どうやら産湯をつかるまえからすこしは酒気をおびていたのではないかと私などはにらんでいる。寡黙のひとであるとはいえ先生は、少年時代東京の矯正学校にかよったこともあるという「スタッタリング」の残響をのこしながらも、いったん酒がはいるとなかなかの座談家に変貌する。

そして、話柄はいろいろにわたる。戦争中大日本帝国陸軍兵士として高射砲を撃ったはなし——このときわれらいっぱい機嫌のかつての小国民のなりそこないどもは、「それじゃ日本が勝てるはずがないですね」と半畳をいれるのをつねとした。抗生物質もなにもない戦後のあのすさまじい時代に肺患をわずらって、まるで達磨さんのように面壁九年呻吟したはなし——それを聞いて私は「おれのときはすでにストマイもパスもヒドラジッドもあったっ

け」と妙に感心しながら、おたがいに生きのびたことをひそかに慶賀した。それから……浅草のはなし——上方ぜいろくの私には、上野・浅草はついに江戸文学のトボスに終わりそうだが、「強いばかりが男じゃないと、いつか教えてくれた」のが先生だった。そしてまたそれから、いまそかりし御母堂のはなし……等々。「小林 亨 教授における‘mother-son relationship’について」は、つとに、同僚の中尾俊光先生の慧眼が指摘しているのでここではふれないことにしよう。

こんなふう話しをしてぼくたちは飽きない。だから、お宅では二日くらい口をきかないこともあった（面倒くさい、というのがその理由である！）と聞いたことがあっても、そんなことは信じられないほどだった。談論風発とはいかないが、寡黙のうちにも座談の快樂をわれひとともにすることを先生は知っておられた。種田山頭火は酒に酔ってゆく過程を、「ほろほろ、ふらふら、ぐでぐで、ごろごろ、ほろほろ、最後がどろどろ」といっているそうである。先生は、しかし、たいてい「ふらふら」どまりで、「ぐでぐで」などはいちども見たことがない。はなはだ酒品がよろしいのである。

そしてほろ酔うほどに呑むほどに、のど自慢がでる。どうも生来唄がお好きらしいのである。きょうは歌えないというときは、だから、からだの具合がよくないときで、年下の酒友はそれを切り上げどきのメルクマールにしたものだった。声は「小林ぶし」とよばれる独特のふし回し。まことにのど自慢もむりからぬことと思うほどの、高音がみごとな、甲高いくらいのテノールである。美声である。むかし早稲田の大隈講堂で、バイオリンのあの巖本眞理の演奏のあと、ひきつづきおこなわれた歌のコンクールかなにかで入賞し、褒美にたばこを（敗戦後すぐの世相をなんと反映していることか！）もらったという話をきいたことがある。巖本眞理とおなじ舞台上で歌ったのがよほどうれしかったらしい。

ところで、先生のご専門領域——イギリスの18世紀のスイフトやロレンス・スターン——については、私は門外漢である。門外漢なりに、それでも、先生のスターンやスイフトにたいする偏愛はいささか承知しているつも

りである。ある大学から18世紀英文学の講義をしてくれないかと誘いがあったとき、先生はけっきょくお引き受けにならなかったが、このときも、面倒くさいからというのがそのおおきな理由だったようである。そんな面倒くさがりやの先生が丹精こめて訳出されたスターンの「センチメンタル・ジャーニー」は、忘れられない一冊として私の本棚の一隅をこれからも占めつづけるにちがいない。仙骨飄々とした先生のたくまざる諧謔は、スターン仕込みだったかもしれないと思うにつけ、6階の研究室にふっと顔をだせばそれに接することができた至福の時がうしなわれてしまった寂しさを、いま噛みしめているところである。

小林 亨 先生へ

杉 山 秀 子
(ロシア語)

小林先生とおつき合いさせて頂いてからはや15年たちましたが、先生とじっくりお話ができなかったことは残念でした。先生はいつも寡黙で、控えめでいらしたようですが、とてもしベラルでものごとを公平にみることができるといふ方だと日頃から思っておりました。ロシア文学にも造詣が深く、ロシア語の知識もお有りだったことは、英文学を研究されている方の中では稀有な存在だったのではないのでしょうか。在職中にもっとトルストイやプーシキンの御話が先生としたかったと今頃になって悔まれますが、今からではもう遅いですね。先生の御健康とこれからの自由な御研究の成果を御祈りしています。

小林 亨 先生のこと

岡 崎 壽一郎
(英 語)

小林 亨 先生が本年の3月末で退職された。ほぼ、20年の歳月を同僚として過ごさせていただいた。いま、思い返してみると、私は、身近で親しく先生の御話を聞かせていただいたことは、一度もなかったように思う。私が酒を飲めず、宴席にゆっくりといることがなかったために、噂に聞く先生の洒脱な飲みっぷりにも、ついに接することなく終ってしまった。しかし、寡黙な先生の、端正な温顔に秘められた冷徹な人間観察と、清冽ともいえる生き方を、私は、生涯忘れることはないと思う。そして、日頃、疎遠であったともいえる私を、20年前に、本学の専任教員に推挙してくださったのは先生であった。今後は、世事に煩わされることもない念願の人生を送られると思う。長い間、御苦勞様でした。御厚情を深く感謝いたします。

「センチメンタル・ジャーニー」

石 原 孝 哉
(英 語)

小林 亨 先生が大学を去ってあっという間に半年が過ぎた。またこの夏には長年住まわれた荏田を去って大宮に新居をかまえられた。

教師としての大先輩を送ると同時に、同じ地区に住む隣人をも送ることになり、二重の寂しさを味わっている今日この頃である。

小林先生との思い出は、渋谷の居酒屋から始まって、ケンブリッジのフォート・セント・ジョージに至るまで、酒にまつわることが多い。フォート・セント・ジョージは400年の歴史を誇る古いパブで、当時私たちのたまり場であった。ここに小林先生をお連れし、暖炉の前の暗い、ゆらゆら揺れる炎の傍でなまぬるいビターを片手に過ごした夜のことが、まるで昨日のこのように思い出される。

しかし、私にとって一番の思い出は、先生がローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニー』を翻訳、出版されたときにこれを書評させていただいたことである。

1984年の5月のことだから、ざっと10年前のことだが、今読み直してみると何とも恥ずかしいかぎりの書評で、赤面のいたりである。

しかし、当時はそれなりの反応もあったためにかなり自己満足していたのだが、今こうして読み直してみると、改めて、反応が良かったのは書評の故ではなく、先生の名訳故であったとしみじみ思う次第である。この書評で私は『センチメンタル・ジャーニー』を、「明確な太い線によってではなく、明暗の微妙な色調で描かれながら、不思議な生々しさをもっている」と評した記憶がある。小林先生のお人柄と作品とをダブルさせていたのかもしれない。

大学という枷を解かれた小林先生の今の生活は、スターンが旅の形を借りて、実は「自分の心の中を、自分の興味と感情に導かれて」旅したように、自由気ままなものであろう。

悠々と「センチメンタル・ジャーニー」を楽しむ先生をうらやましいと思う。

小林 亨 先生へ

矢 島 直 子
(英 語)

小林先生が停年を前にして駒沢大学を去られたのは実に残念だ。外国語部とそれ以前の古き良き（しかし大変だった）時代を担った方がお一人抜けたのだから。

でも、半面、よい時におやめになられたのだとも思う。すでに何年か前に、英語科は語学教師なのだと自らを位置付けて、ある程度実際的な英語教育の実践へと向かったわけだが、今後その傾向は募りこそすれ、減ることはないだろう。アメリカでは語学教師の一部の人たちを“driller”（外国語の訓練—教育ではない—をする人、という意味のようだ）と少々見下げて呼ぶ、と聞いたことがある。私たちが遅かれ早かれ、“driller”になるのではないかと不安な気持ちに駆られる今日この頃であるから、おやめになるにはよい時期だろう。

小林先生といえば、イギリスを気に入っていらして、留学をなさったのみでなく、夏休みも旅行をなさっていたことを思い出す。どの時だったか記憶が不確かなのだが、ロンドンでお会いしたこともあった。いかにもイギリス旅行を楽しんでおいでの御様子だった。けれども、その後大分たって、「もうイギリスに出かける気力がなくなった」とおっしゃっていらしたので、残念に思ったものだ。と同時に、先達として参考にさせて頂くと、自分もいつかイギリスに行く元気をなくす時が来るのだろうという予感もした。その時まで、変わらないようできて徐々に変わっていくイギリスを、できるだけ見ておきたいと思う。語学教師である以上、生の言語にまめに触れておく必要があるとも考えるからだ。

さらに先生のことで思い出すのはお酒だ。英語科の諸氏と御一緒したものが、先生はどんなにお飲みになられても端然としていらした。お好きだったお酒も今はあまりお飲みにならないそうだ。下戸の身にすれば、飲んでも飲まなくても御様子が変わらないのなら、飲まないに越した事はない、いや飲むのはもったいない、等と憎まれ口をたたきたくなるのだが、お好きだったものが段々減っていくのは、先生御自身にすれば寂しくていらっしゃるだろう。それとも、もうほとんど悟りの境地に達してしまわれたのだろうか。

夏休みになるかならぬかの頃、先生からお葉書を頂いた。やめてから太った、と書いていらしたのを読んで、先生に御無理を強いていたのかもしれないとお気の毒に思った。そう思いながら、やはり残念だった。与えられた仕事を黙々と誠実になさっていたお姿を見ていたからだ。本当はいやだと感じていらした職務もおありだったのかもしれないが、ついぞ不満をおっしゃったことがなかった。だからこそ、おやめになる事態になられたのもあろう。これからは悠々自適の生活を楽しんで下さい。